

# 雪嶺集

〈宮坂静生 鑑〉



## 鳥の恋

小林 貴子

途中下車したとき駅名鳥の恋  
背もたれのなくて孤影や西東忌  
春の潮真中に棒の立つやうな  
一縷ある謀叛心や春の潮  
春未満なり星ばかり落ちて来る  
硼酸で目を洗ひたし霾晦  
とらふぐの皮を食したる解散会  
春のフルート音色は鳥の枝移り  
やどり木がやる気をなくしをる春日  
春の眼科医目玉親父を出して来る

## 時間の紐

佐藤 映二

鑑真和上さへづりのなか還りませ  
いざごぎの昂じて戦いかのぼり  
蝌蚪の紐時間の紐といふべかり  
壺すみれ寝ころんでよし起きてよし  
天を衝くビルや眉間に花木五倍子  
足場組み筋交ひ確と花かんば

## 四季と折り合っ

佐藤 映二

穏やかな海を抱く逗子。昨年の京都に引き続き、わが結社「岳」の研修会（参加者六十一名）が開かれた。前日に逗子入りした私は、吟行がてら、バスで二十分ほどの葉山に足を伸ばし、『砂澤ビッキ展』を観る機会に恵まれた。

まず度肝を抜かれたのが、広い展示室の中央にただ一つ、でんと置かれた高さ二メートルに及ぶ一本彫り。基底から天へ向って絞まりつつ反る楕円盤状の、さながら顔無き達磨像のよう。それが「神の舌」と名づけられた作品だと知る。出

生地で作作の場でもある旭川はアイヌ文化発祥地の一つだ。

別の展示室では、榎や栗、蝦夷赤松などの材を使った作品（気面・季面・寄面・鬼面・樹面）がそれぞれの地で蓄えてきた、日光や風雪の記憶を語りかけてくるようだ。これらはすべて、樹木に潜む魂との対話を辛抱強く鑿によって刻みこんだビッキの代弁者であるとも言えよう。

季語の働きを生かす上で一つの大切なバネともなり得るアニミズム体験に憧れる私にとって、これらの彫刻作品は、人類誕生以前に戻されるような自然界のナマの息吹を感じさせずにおかない力があつた。